

言語活動で「分かった」という 実感を持たせ、学ぶ意欲を伸ばす

横浜国立大教育人間科学部教授、学部長特任補佐（教職大学院担当） 高木展郎のぶ

言語活動に熱心に取り組んではいるものの、活動自体が目的になってしまったり、さまざまな課題を感じている小学校が多いようだ。言語活動を通じて主体的に学ぶ意欲を育むためには、どのような考え方に基づいて活動を組み立てればよいのか。今求められている言語活動のあり方について、横浜国立大の高木展郎教授に話を聞いた。

言語活動が重視される背景

新たな学力観に基づいた 言語活動が求められている

言語活動が重視される背景には、これからの時代に通用する新しい学力の育成が求められていることがあります。そのことを広く知らしめたのが、いわゆるPISAショックでした。2003年に行われたPISA調査では、読解力の日本の順位が00年の8位から14位に、更に06年では15位にまで下がったこと

が問題視されました。記号式の問題の正答率が高い一方で、記述式は無回答が多いという実態は、日本の教育課題を明確に表していました。

先進諸国に求められる学力の1つとして、OECDが示した読解力は、「受信」「思考」「発信」の過程から成る、いわば考える力と捉えられます。そうした学力を付けるために、07年に学校教育法が一部改正され、「思考力、判断力、表現力」という言葉が盛り込まれました。これに加えて、「基礎的・基本的な知識・

現場の先生の声—言語活動の課題

■ 教員の共通理解が不十分

- どうしても基礎・基本の定着を図るための授業が中心となっている。
- 「言語活動」の実施が先行し、充実が求められている背景について、まだ十分に理解されていないのが現状。

■ 活動が目的化している

- 子どもが毎日順番にスピーチをする実践が見られるが、次第に形骸化する傾向がある。
- 言語活動への意識は高まってきたが、発達段階に応じた活動が系統的にされておらず、やや単発的な印象がある。

■ 評価が難しい

- 活動の中で、どのような学びの姿があったときに、思考力・判断力・表現力が育成されるのか、検証する必要性を感じている。
- 活動が目的となり、育てたい力が定着しているか、評価部分が弱い。

*「VIEW21」小学版読者モニターアンケート（2014年2～3月実施）より一部を掲載

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動



たかぎ・のぶお ○横浜国立大
教育学部卒。兵庫教育大大学
院学校教育研究科言語系修
了。東京都公立中学校教諭、
神奈川県立高校教諭、筑波大
学附属駒場中学・高校教諭、
福井大、静岡大を経て現職。
著書に『ことばの学びと評価』
(三省堂) など。専門分野は
教育方法学、国語科教育学。

技能」および「主体的に学習に取り組む態度」が、「学力」を構成する重要な3つの要素として、初めて定義されたのです。

先生自身が受けてきた教育における学力観や指導観から脱却するのは、容易なことではありません。しかし、学力の定義は、時代に合わせて変化するという認識を持つ必要があるとも考えます。

例えば、以前は暗記中心の学力が主流でしたが、今では、分からないことがあってもインターネットで即座に調べることが出来るので、「情報を活用する」といった力がより重要になっています。こうした流れの中で、根拠に基づき自分の意見を述べる事が出来る力が求められており、思考力、判断力、表現

力などが重視されるようになりました。インプット偏重から、「話す・書く」といったアウトプットを大切にしたい学習活動、すなわち言語活動の充実が求められているのです。

これは、世界共通というわけではないことも大切な視点です。例えば、識字率の低い国では、読み書きなどの学力が優先されるでしょう。先進国の日本だから、そうした学力が必要と考えられているのです。

言語活動での注意点

「活動ありき」の発想を捨て 付けたい学力に沿った言語活動を

言語活動とは、あくまで各教科の学力を育

てるための学習活動であり、それ自体が目的ではありません。言語活動は、「教科等の目標を実現する手立て」なのです。

ところが、学校によっては、言語活動を行うことが目的となってしまう、活動を通して育てたい学力が十分に考慮されておらず、「話し合いが盛り上がりが良い」と思われることもあるようです(図)。言語活動は型から入るのではなく、子どもたちに付けたい力を見極めて、そのために必要な活動内容を検討するのが適切な流れです。

言語活動が学力育成の手段であることは、評価の観点にも大きくかわってきます。評価の対象となるのは、言語活動そのものではなく、あくまでも活動を通して付いた力です。どれだけ生き生きと活動をしていても、付けたい力がきちんと身に付いていなければ意味がありません。そこで、観点別評価を設定して評価する必要があります。

やや極端な言い方ですが、付けたい力が十分に身に付いたと判断したら、言語活動を途中で打ち切ってしまうても問題はないのです。日本の小学校の先生の丁寧な指導は誇るべきところですが、言語活動において、全ての子どもへの動きに対応しようとすると、必要以上に時間を掛けてしまうことがあります。その点に気を付けた方が、授業がより充実するでしょう。

**「説明」や「論述」など
普段の活動を意識的に行う**

言語活動の効果的な方法を見ていきます。
基本的に、指導案で「付きたい力」を明確にし、それを達成するために有効であるならば、言語活動を取り入れます。例えば、知識・技能の習得においては、従来型の指導の方が効果的な場合もあるでしょう。全ての単元に言語活動を行うべきと考える先生がいますが、それは誤解です。思考力、判断力、表現力を育てるために言語活動を取り入れると考えてください。

言語活動の形態には、「記録」「要約」「説明」「論述」「討論」が示されています。例えば、文章を要約したり、自分の考えを論述したりすることも、立派な言語活動です。最適と思われる形態の言語活動を取り入れれば良いのです。

このように考えると、言語活動がとり入れやすく感じられるのではないのでしょうか。そうなのです、言語活動は、普段から先生方が実践している指導と何ら変わりがありません。それを意識化することが、求められているだけなのです。これまでは無意識に行っていた言語活動を、意識して授業を組み立てることによって、付きたい学力を見据えたより効果的な学習が出来る。それが「言語

活動の充実」で求められていることです。ですから、たつぷりと準備に時間を掛けて、大掛かりな活動をする必要は全くありません。

おそらく最も取り入れやすいのは、「説明」です。ペアになって説明し合う学習活動は、短時間で簡単に行えます。しかも、簡単な言語活動ではありませんが、まず自分が理解していなければ、相手が理解できるように説明できません。おのずと、子どもがしっかりと考えられるのです。「論述」も比較的容易な活動です。調べたことをまとめて書くだけでも十分です。

実は、研究授業などで実践されている言語活動をそっくりそのまま実践することはお勧めできません。モデル授業が非常に参考になるのは確かですが、授業はあくまでも前時までの学習の積み重ねの上に成り立っています。言語活動は、目の前の子どもの実態や、それまでの授業の流れを踏まえて計画することと高い効果が期待できるのです。

効果的な言語活動のポイント



**「聴いて、考えて、伝え合う」
授業づくりを**

言語活動は、子どもが「分かった」といった学習の喜びを実感しやすい学習活動でもあります。そうした実感は学びへの意欲を高め、「もっと学びたい」といった思いを生み出す

効果が期待できます。

例えば、次のような活動では「分かった」という実感を持ちやすくなります。

まず、学習で分かったことを隣の子とも伝え合います。そして、自分の考えではなく、ペアの子どもがどう考えているかを説明してもらいます。これが少し高度になると、「〇〇さんはこう言ったけど、私はこう思う」などと、自分の考えと比較しながら発表できるようになります。全員の説明を聞くのは大変ですから、ノートに書かせて、授業後に評価をしてもよいでしょう。

言語活動で話し合いなどを行う場合は、「聴いて、考えて、伝え合う」という流れを大切にしてください。自分の考えを持つ時間を十分に保障しなければ、話し合いをしても深まらないからです。

子ども同士が伝え合う環境があることは、学校教育の最大の利点といえます。そうしたかわり合いがなければ、授業は答え合わせをするだけの場になってしまいます。もちろん、知識の伝達も重要ですが、それだけをしていけば良い時代はもう終わったのではないのでしょうか。言語活動を機能させることで、子ども同士がいかにかかわり合いながら、考えを深めていくかを工夫することが、これからの授業づくりの重要なポイントです。

子ども同士が伝え合う授業をすることで、一人ひとりに居場所が生まれて、人間関係づ

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

くりや学級づくりにつながっていきます。そのため心掛けていただきたいのが、「あたたかな聴き方、やさしい話し方」です。これが定着すれば、学校は大きく変わります（高木教授が指導に入られている学校事例はP. 8～11で紹介）。

特に、1年生のうちから「聴く」ことを徹底的に大切にさせましょう。小学校入学を控えた子どもに「学校で何をやるの？」と聞くと、「お勉強！」と口をそろえて答えます。その段階から、「勉強は、人の話を聴くことだ」と何度も教えましょう。1回教えるだけでは身に付きませんから、友だちの話を聴けていない時はいったん止めて、もう一度話してもらいます。それを何度も繰り返し返してください。分からないことを分からないと、素直に表現できる学級をつくることも大切です。やはり1年生の段階から、「分からない」「困っている」と言った子どもを褒めるようにしてください。そうすることで、分かった子どもが、分からない子どもに温かく教えられるような関係性を築いていただきたいと思えます。先生方は子どもと一对一の関係は得意ですが、これまでは子ども同士が聴き合う関係をつくる指導には、あまり力を入れてこなかったかもしれません。子どもが発表する時、先生は教室の対角線に行くようにといわれますが、それでは子どもが先生の顔だけを見て話すことになってしまいます。私は、先生が発

表者の後ろに立ったり、あるいは時々子どもの目線から消えるようにしゃがんだりすると良いと思います。発表者の後ろに立つことで、他の子どもがどのような様子で聴いているのかを確認できますし、子どもが先生の期待に応えようと顔をうかがうことなく、自分の思いだけで発表できるからです。

教師が大切にしたい姿勢

教師に求められるのは「聴く」「待つ」姿勢

小学校の先生は、全ての教科を指導しますから、時間的な制約もあり、教師用指導書等を参考にして授業を組み立てることもあるかと思えます。しかし、指導書はよく練られているものの、目の前の子どもの関心や課題には合っていないこともあります。例えば、指導書では10時間の単元構成でも、子どもの理解に応じて、時数を増減する方がよい場合もあるでしょう。指導書はあくまで参考にとどめ、子どもの実態に合わせたカリキュラムを練っていただきたいと思えます。

また、先生方は説明することには大変長けていますが、これからは「聴く」と「待つ」を心掛けていただきたいと思えます。先生がたくさん話しすぎると、子どもが話す時間がなくなってしまう。子どもが話すのをしっかりと「聴き」、子どもが考えるのを「待つ

て」、本題からずれたら修正する。そこに先生の出番があります。そのためには、子どもにとって先生が一番の聴き手でなくてはなりません。先生が「教える人」から「働き掛ける人」になる意識も必要でしょう。

校長先生には、先生方が言語活動に関する共通理解を深めていくような役割を期待しています。その際は、言語活動が学力を付けるための活動であること、また活動そのものではなく、それを通して付いた力が評価の対象であることなどを留意してください。そして、先生の個性を大切にしつつ、皆が同じ方向を向いてチームで子どもを育てるような学校づくりを進めていただきたいと思えます。

主体性を育む言語活動のポイント

- ◎「分かった」という学習の喜びを実感しやすいのが言語活動。付けた力を考慮した上で、活動内容を検討する。
- ◎力が付いたと判断したら、必要以上に言語活動に時間を掛けなくても良い。普段行っている「説明」や「論述」を意識的に組み入れるだけでも十分なことも。
- ◎子どもたちが「聴いて、考えて、伝え合う」授業が、学級づくりにもつながり、子どもの学習意欲も高まる。
- ◎子どもに「教える」という意識を改め、子どもが話すのを「聴く」「待つ」ことを心掛けていく。